九州産業大学国際文化学部紀要　第24号　19－33（2003）

ヴュルテンベルク地方の宗教的風土
――その歴史的素描――

中　島　秀　憲

始めに

古来ヴュルテンベルクは多くの偉大な宗教家，文学者，哲学者を生んでいる。例えば，ベンゲル，エティンガー，ハーン，ブルームハルト，ヘルダーリン，ヘーゲル，シェリング等を挙げることができる。われわれは，これらの人々の中に，共通する思想あるいは信仰を認めることができる。それは，「神的なもの（絶対者）が被造物（有限者）の中に潜んでおり，神的なものは被造物との関わりにおいて自らを発現させている」という，非常に宗教的な世界観である。以下，粗野そして強引ではあるが，私は，ヴュルテンベルクの歴史を通してこの世界観の流れを素描していきたい。

［古（いにしえ）のヴュルテンベルク］

ヴュルテンベルクはドイツ南西部ライン河上流の右岸に位置する。古よりヴュルテンベルクはシュヴァーベンと呼ばれていたが，この語源は，ゲルマン民族の一部族スエービー族に由来している[1]。紀元前二世紀以前，ライン左岸にはガリア人が，右岸にはゲルマン人が居住していた。カエサルのガリア征服以降，ガリア人とローマ人の同化は急速に進展して行ったが，右岸は彼らにとって侵略不可能で不気味な荒涼とした土地であった。タキトゥスはその著『ゲルマニア』でゲルマンの地を次のように述べている。「土地はその姿に幾分の変化はあっても，総体的には森に蔽われてもの凄いか，あるいは沼地が連なって荒涼たるもの」[2]と。

タキトゥスはゲルマン人の宗教生活を次のように述べている。彼らは，小片に切った若枝にある種の印をつけ，それを白い布に撒き散らし，司祭があるいは家長が祈りながら取り上げる。そしてその印にしたがって吉凶を占う。吉の場合，占い鳥の声や飛び方に尋ねて，確かめられる。また，馬の嘶きや鼻息で占いもなされた。また，スエービー族にとっての森は神聖なものであった。「定められた時期に同じ血をひく支族の全てが，父祖以来そこで行われた占兆や古代からそこに払われた畏敬のゆえに神聖な一つの森に，使節を介して会同し，公の名の下に，ひとりの人身を犠牲に供して，

野蛮な祭祀の戦慄すべき秘儀を執行する」[3]。

やがて四世紀に入り，ゲルマン民族の大移動が始まる。現フランスやドイツ地方に入ってきたのは，ライン右岸に住んでいたフランク族であった。クロヴィスは，ガリアのローマ人を打ち破り，また他のゲルマン部族に対しても勝利を納めていき，481年に初代フランク王位についた。彼はランスの聖堂でローマ教会の洗礼を受けた。これにより，フランク人と先住のガロ＝ローマ人との融合が容易になった。カール大帝の時代，フランク王国は最盛期を迎える。彼は，ローマ教皇からローマ皇帝の称号を与えられる。しかし，大帝の死後，孫たちの間で相続争いが生じ，王国は，東フランク，西フランク，ロタリンギアに三分割された。東が後のドイツを，西が後のフランスを形成するのである。東西に挟まれたロタリンギアのラインラント（ライン河以西）とアルザス，ロレーヌ（現フランス東部）は，ドイツとフランスの抗争に翻弄されることになる。

［宗教改革，ピエティスムス］

1530年頃から宗教改革の波が南西ドイツにも押し寄せてきた。特にヴュルテンベルクはその地方有数のプロテスタント国となった。

ルターは，神と個人の間の直接的な関係および信仰を有する人々の共同体としての霊的・内面的教会のみを認め，神と個人の間の外的な権威を持つ媒介つまり肉体的・外面的教会を認めなかった。だが，彼は真の教会が直ちに築かれるとは考えなかった。彼は，真の教会が秩序づけられるまでは，教会のメンバーたる領邦君主が「非常時の監督者」として暫定的に教会問題について具体的施策をとることを希望した。かくて君主の手により，教会巡察や教会規則などが制定された。しかし，ルターの「暫定的」という意図に反し，この領邦君主主導の教会は，宗教改革が及んでいる全ての地方に長い間存在することになる。例えば，ヴュルテンベルクにおけるこのような「お上」と教会との癒着について，ハルトゥンクは『ドイツ国制史』の中で次のように述べている。「ヴュルテンベルクの教会査察令は，福音的な教義，キリスト教的な規律と善き行政のための配慮を意図し，査察にあたっては，単に聖職者の教義や行状のみならず，官吏の職務遂行状態をも調査するようはっきり指示しているが，逆に領邦令は，ただ公民としての生活に関する規定ばかりでなく，礼拝への出席についての規定も与えていた」[4]と。

また，宗教改革が勃発して数十年後の16世紀半ばには，ルターの「聖書のみ」の精神に反する事態が進展していた。すなわち，プロテスタント神学者は，聖書の言葉を

常にルターの権威に照らし合わせて解釈するようになった。かくてルター派の正統派が誕生するのである。

宗教改革以降，ドイツではプロテスタントとカトリック両教徒の争いが多発していたが，1555年のアウグスブルグの和議で一応の決着がつけられた。「住民はその地の領主の宗教に従う」という原則が立てられたのである。しかし，この平和もつかの間であった。1608年，カトリック国のバイエルンが，その住民の多くがプロテスタントであるドーナウヴェルトを併合し，カトリック信仰を強制した。これに危機感を抱いたザクセンやヘッセン等の諸侯は，カルヴァン派のプファルツ候を擁して新教徒同盟（Union）を結成した。バイエルンもこれに対抗して旧教徒同盟（Liga）を作った。一触即発の中，1618年ついに争いが勃発した。この争いに，デンマーク，スウェーデン，フランス，スペインが干渉し，ドイツ国内で三十年の長きにわたる戦いが繰り広げられるのである。各軍隊は略奪，暴行の不法を尽くし，疫病が流行し，農村は壊滅的打撃を受けた。また，戦時中の商業活動の麻痺や主要な港の喪失によって商業も不振の底に達した。また，人々の心は荒み，聖職者も平信徒も倫理的に堕落した生活を送っていた。もちろん，ヴュルテンベルクもこのような疲弊を免れることはできなかった。

この状況下，プロテスタントの宗教界を中心に，改革本来の教えに還帰しようという気運が高まり，ヤコブ＝ベーメ（Böhme, Jakob 1575-1624）等のドイツの，マダムギュイヨン（Gyon, Jean Marie von 1648-1717）等のフランスの神秘思想家の影響も受け，ドイツ東部のハレや南西部のヴュルテンベルクを中心にピエティスムス（敬虔派）が興隆するのである。これを導いたのが，シュペナー（Spener, Philipp Jakob 1635-1705）を筆頭として，フランケ（Francke, August Hermann 1663-1727），ベンゲル（Bengel, Johann Albrecht 1687-1752），エティンガー（Oetinger, Friedrich Christoph 1702-1782），ツィンツェンドルフ（Zinzendorf, Nikolaus Ludwig 1700-1760）等の父祖（Vater）達であった。

シュペナーの『敬虔な願望』（1675年）は，特にプロテスタント教徒に対し敬虔の実践への関心を呼び起こした。これは彼の没年の1705年までに四版を重ね，ラテン語にも翻訳されて幅広い支持を得た。シュペナーは，ドイツ全土に蔓延している三十年戦争後の混乱やキリスト教の衰退を嘆き，個々の信者の悔い改めや再生が必要であると説いた。この手段として彼は，志を同じくする信者が小さな集会（Konventikel 特に教会外の宗教的集会を意味する）を開いて，個別的に信仰や実践をお互いに励まし合うということを勧めた。また，彼は，当時の倫理的生活の堕落を描き，政治的，聖職的高位者のみならず，一般大衆の腐敗をも明らかにし，改革への着手を呼びかけた。

父祖たちは，ルターの教理を主知主義的に理解しようとする正統派とは異なり，宗教感情を重んじ，生々しい体験としての信仰を強調した。また，彼らは生活の中に信仰を実践していき，禁欲を尊んだ。ピエティスムスはまとまった宗派として展開したものではなく，各セクトによって，信者の階層，教え，聖書観，社会観，教会観等が大きく異なっていた。そして，セクト間では篤い交流と激しい抗争も生じていた。よって，ピエティスムスの全体像については種々の説明が試みられている。その中でハルトムート＝レーマンの定義が最も正鵠を射ているように思われる。彼はピエティスムスの性格を以下のように述べる[5]。

① ピエティスムスにあっては，教会での礼拝よりも，小さなサークルにおける宗教的教化の方が上位に置かれた。ピエティストつまり神の国の子は，意識的に厳格にその集団に属しているキリスト教徒のことを言う。彼らは自らを，主における再生者と意識し，教会にのみ属している大多数のキリスト教徒よりも勝っていると感じていた。

② ピエティスムスは，宗教的な新生や宗教的な内面化への運動・宗教的個人主義と定義されることが多いが，ピエティスムス成立の数十年後に既に確固とした伝統が生じていた。1700年頃にはピエティストたちはシュペナーを，改革を継続しピエティスムスを基礎付けた人ととらえ，ルターと同等に置いた。あらゆる宗教的私的集会では，聖書と並んで，父祖たちによって書かれた教化の本が読まれた。

③ 礼儀正しく生き，自らを再生者と見なすだけでは，まだピエティストとは言えない。集会の仲間から兄弟と呼ばれ，再生者として受け入れられることによって初めてピエティストたり得る。俗世からの分離（これは他のキリスト教徒にも言えるが）は，兄弟たちの同胞感情を深めた。彼らは，生き方や信仰において俗世から分離してしまったという意識の中で生活し，将来においても大多数の生ぬるい見せかけのキリスト教徒や教会およびその他の様々な形式の公的生活から分離するという確固たる意思を有していた。個々のピエティストは自らの再生について常におぼつかなく思っていたが，兄弟たちに支えられて，迷うことなく神の恩寵を信じ，悔い改めによって罪を克服することを求め，回心の深い感情を通じ，個人的な癒しの様々な段階を経て，永遠の癒しに達することを求めた。

[ヴュルテンベルクのピエティスムス]

ヴュルテンベルクのピエティスムスもシュペナーによって大きな影響を受けている。しかし，シュペナーの改革を受け入れる下地はアンドレエ(Andreä, Johann Valentin

1586-1640)によって準備されていたのである。彼は1611年のジュネーブ滞在中カルヴァンによって大きな影響を受けた。1620年から1638年にかけてカルフ(Calw シュトゥットガルトの西約20kmに位置する。ヘルマン＝ヘッセの故郷でもある。）の教区監督長として厳格な教会規律を定めるとともに，人々に対して単なる知識としてではなく生活に根ざしたものとしてのキリスト教を訴えた。その後三十年戦争の最中にも，宮廷説教師としてあるいは教会会議の役員として，混乱していた教会運営を立て直そうと尽力した。彼の思想は17世紀後半のテュービンゲン大学神学部に大きな影響を与えた。

テュービンゲン大学法学部のフロムマンの招待を受け，シュペナーは1662年の半年間，シュトゥットガルトとテュービンゲンに滞在し，多くの支持者を得た。彼はヴュルテンベルクの教会改革について積極的に助言を与えたのみならず，二つのcollegiumをも開設した。大学の教職員や貴族あるいは少数ではあるが商人達が出席した。彼らの間ではシュペナーの『敬虔な願望』が競って読まれた。シュペナーの教えの中には，一般大衆や聖職者のみならず宮廷人に対する批判の要素も含まれていたが，時の公爵はこのシュペナーによる教会改革を容認していた。なぜなら，忠実で倫理的な臣民の養成という点で得るところが大であったからである。

シュペナー自身は教会内ピエティスムスの立場を貫いていたのであるが，彼の教会外での集会への呼びかけや教会聖職者の腐敗した生活の批判には，明らかに「教会からの分離」という思想が内在していた。1688年以降カルフやシュトゥットガルトを中心に，ごく少数ではあるが，領邦教会から分離しようとするピエティスト（セパラティスト）の活動が目立ってきた。彼らは，シュペナーやヤコブ＝ベーメ，それにフランスやイギリスの神秘主義者から大きな影響を受け，終末論的傾向を強く帯び始めた。この傾向は，内外の戦争の危機が強まった1710年頃に頂点に達した。例えば，シュトゥットガルトでは1704年以来，新千年王国の信奉者にしてギムナジウムの教師でもあるシュピンドラーの自宅がセパラティストの溜まり場となった。しかし，その後ベンゲル学派によってピエティスムスがまとめられたことや「ピエティスト通達」によってピエティスムスが合法化されたことにより，セパラティストの運動は1730年頃から下火になっていった。領邦教会的ピエティスムスのメンバーには上層市民階級が，セパラティスト的なピエティスムスには若い神学者や医者，商人が多かった。

また，ヴュルテンベルクのピエティストに少なからず影響を与えたのはツィンツェンドルフ率いるヘルンフート派であった。彼はハレでシュペナーやフランケから大きな影響を受けた。彼は，激しい弾圧を受けているカルヴァン派ボヘミア兄弟団（モラヴィア派とも呼ばれる）の悲惨な状況を伝え聞き，バーセルスドルフの自分の地所を

彼らの信仰の場所に提供した。彼らはこの地をヘルンフート(Herrnhut 主の保護)と名づけた。また，彼ら以外にも宗教的弾圧を受けていた教団も入植してきた。やがて，彼らはツィンツェンドルフの影響を強く受けることになる。ツィンツェンドルフは神学的体系に反対し，心情や感情，信仰体験を重んじた。彼にとってはイエスによる購いが信仰の中心であった。彼は，隠された神と啓示された神というルターの区別を強調し，イエスを神聖の全ての豊かさが啓示されている特別な神と捉える。創造と購いを通じて啓示された神が子なる神イエス＝キリストなのである。この神への信仰は更に，信者の中に存在する購いへの愛の体験を与える。この愛の経験においてイエスは花婿であり，信者は花嫁である。

1737年以来ツィンツェンドルフは多くの布教使をヴュルテンベルクに派遣している。彼はヴュルテンベルクの教会監督長に就任したいという希望も持っていた。しかし，終末論を強調するベンゲルやエティンガーと，愛の体験を熱く説くツィンツェンドルフとは所詮相容れるものではなかった。前者は後者を排斥しようとした。しかし，布教使達の努力により，ヘルンフート派はテュービンゲン大学神学部に徐々に勢力を伸ばし始める。1741年神学部はヘルンフート派の教えを「ルターの教えを正統に受け継いだもの」として正式に認可した。

[ベンゲル，モーザー，エティンガー]

テュービンゲン大学神学部や哲学部がヴォルフ哲学を排除したため，ヴォルフの弟子の啓蒙主義者ビルフィンガー（Bilfinger, Georg Bernhard 1963-1750）はテュービンゲンを離れていたが，1735年エーベルバルト＝ルートビッヒ公の要請により再びこの地に戻ってきた。かくて漸くテュービンゲンにおいても啓蒙的な神学や哲学が成長し始めるのであるが，これがヴュルテンベルクのピエティストに自分達独自の教えを深く考えてそれを体系的に構築することを強いたのである。このような状況下，ベンゲル（Bengel, Johann Albrecht 1687-1752）がヴュルテンベルク・ピエティスムスの最初の偉大な神学者，魂の慰労者，教育者，そして政治的助言者として現れるのである。

ベンゲルにあっては，実践的教化の手段としての聖書は背後に退き，救済認識の手段としての聖書が前面に押し出された。彼はヨハネの黙示録を読み解き，「1832年にアンチキリスト教徒の騒乱が始まり，1836年にキリストが再臨して最後の審判を行い，新千年王国が始まる」と預言した。このベンゲルの思想は，「アンチキリスト教徒」的な世界の中で自らを少数派と感じていたヴュルテンベルクのピエティストにとって大

きな支えとなった。

1753年カール＝オイゲン公（Karl Eugen 1728-1793）は「ピエティスト通達」を公布した。ここに，集会が公的に認められることとなり，領邦教会内における神学的・精神的二元主義（ピエティストと領邦教会メンバー）が確立された。とは言え，集会には多くの制限が加えられた。例えば，出席者を15名以内とすること，所轄の聖職者に集会の届出をすること，夫婦の場合はお互いの了解を得ること，教会の礼拝時間や夜に集会を開かないこと，隣人や教会聖職者それにお上について論議をしないこと，等の事柄が義務付けられた。これによってピエティスムスは政治的・社会的な秩序に組み込まれてしまったが，しかし，後に，この秩序に批判的なピエティスト達が再び教会から離れていく契機となった。(出席者が15名と限られていたが，一人でも多くの出席者を確保するため，時に牧師は平信徒に集会を任せることもあった。これは，後の民衆的ピエティスムスの成長の一因となった。)

集会を公的に認めるよう働きかけた有力者の中の第一人者がモーザー（Moser, Johann Jakob 1701-1785)であった。彼は，若きヘーゲルによって「我々の領邦の輝き」[6]と讃えられている人物である。当初，モーザーは等族（Stände 君主から承認された諸々の特権を有する，聖職者・貴族・市民の三身分を言う）の協力の下にヴュルテンベルクの産業・社会・政治改革を進めようとした。だが，進歩派も保守派も全ての等族は既得権が侵害されることを恐れ，協力には消極的であった。当時絶対主義を志向していたカール・オイゲン公は，時代の変化と公共の福祉を前面に押し出し，慣習的な協約に縛られない政治を行おうとしていた。そこでモーザーは方向転換し，強い関心を示しているオイゲン公の協力の下に改革を推し進めようとした。これによってモーザーと等族との関係は急速に悪化していった。七年戦争（1756-1763）時オイゲン公はプロイセンに出兵しようとするが，モーザーは強く反対した。1759年公は委員会に対して新規の高額な賦課金を要求した。委員会がこれを断ると公は武力を以って等族の金庫から賦課金を奪ってしまった。モーザーは「統治者も等族も同一の古からの法に結ばれている」と公を厳しく諫めた。公はこの諫言に激しく怒り，1758年から1764年までモーザーを牢獄に捕らえた。だが，この英雄的な行為によってモーザーは等族の殉教者的存在となり，19世紀になっても保守派からも自由主義的進歩派からも英雄と見なされ，多くの伝説や伝記が作られた。

モーザーは1727年に回心を体験し，1734年から1736年にかけてシュトゥットガルトで友人と一緒に集会を開設した。しかし，ピエティスムスがあまりにも閉鎖的で律法的（自らの信仰体験よりも父祖達の教えの方を重視するという意味で）であることに失望し，1751年以降は集会にも関係しなくなった。ただし，ベンゲルに対する支援だ

けは止めることがなかった。モーザーは顧問官として伝統的な義務を越えて自分の理想を実現しようとしたが，ベンゲルは自分の職務を超えることについては一切手を触れなかった。ベンゲルから大きな影響を受けていたピエティスト達もモーザーの改革運動には無関心であり，投獄されていたモーザーの解放について全く働きかけなかった。彼の解放に大きな力を果たしたのはプロシャ，イギリス，デンマークの宮廷であった。

解放後，モーザーは政界に復帰する。当時，ヴュルテンベルクは君主と民会の二重政治が行われていた。例えば，公爵が直轄地以外において徴税をなそうとする時は民会の承認を得なければならなかった。民会は非常時においてのみ君主の招集により開催された。民会は小委員会（教会監督長二人と代議士六名）と大委員会（小委員会のメンバーの他に教会監督長二名と代議士八名を加えたもの）から構成されていた。小委員会は常時開催されており，大委員会の召集やそのメンバーの補充の権利を有しており，民会の金庫を支配していた。このような小委員会の寡頭政治を打破しようとする委員会の少数派は，民会と公爵とが協力して政治を行うことができるような改革をモーザーに期待する。小委員会が牛耳っている民会と公爵の争いは神聖ローマ帝国裁判所にまで持ち込まれたが，形勢は公爵にとって不利であった。そこで1770年公爵は小委員会と和解して「相続協定」に調印した。公爵は等族に対して従来の慣習法を保証し，等族は公爵に対し常備軍設置と財政的優先権を承認した。モーザーや他の改革的委員は小委員会によって民会から追放され，一部のピエティストの願い——公爵と協力してキリスト教的な国政を遂行しようという——は全く壊されてしまった。

ベンゲルを土台として，ヤコブ＝ベーメやカバラ，それにシュヴェーデンボルクの思想を吸収して独自の歴史神学を形作ったのがエティンガーである。彼によれば神は内在にして超越である。神の生命は人間のみならず自然をも貫いているのである。自然の研究は神の摂理を明らかにすることに通じる。これを認識する力が sensus communis（共通感覚。時間の内に永遠を，有限者の内に超越者を把握する感覚）である。また，自然の歴史は，源すなわち神の国への還帰であり，この世の国はその束の間の通過点に過ぎない。当然このような思想の内には，「この世を否定してより高い世界へ」という時代批判を含んでいるはずであるが，ベンゲルと同様エティンガーも政治的改革あるいは隠遁的姿勢には全く与しなかった。彼らにとって現存する支配体制を承認することはキリスト教徒としての義務であった。エティンガーは教会監督長として等族のメンバーとなったが，自らの職務を越えることについては手を触れなかった。一時ヴュルテンベルクの聖職を務めていたフリッカーは1761年の手紙で，テュービンゲンで神学を学んでいる者の５分の１あるいは６分の１がピエティストであると報告し

ている。当時のテュービンゲン大学の神学部では，ベンゲルの思想が啓蒙主義と十分に張り合っていたのである。学生たちの手によって集会が開かれていたが，エティンガーも足繁く参加していた。

カール＝オイゲン公は，帝国伯爵の娘と二度目の結婚をする。彼女のピエティスムス的な心情に影響され，公は宮廷の華美な生活を改め，また過去の自分の行状を懺悔した。ピエティストと公との関係も良好となっていった。

［民衆的ピエティスムス］

1760年頃まではほとんどの集会や教化（Erbauungsstunden）は牧師によって執り行われていた。(それ以前でもカルフやシュトゥットガルトでは平信徒が主宰することもあった)。ゆえに牧師が転任した後にピエティスムス的な後任者が来なかった場合，集会や教化は自然消滅していた。また，18世紀後半から，啓蒙的な神学者は社会的そして産業的改革に強い関心を抱き始めた。これにひきかえ，ピエティスムス的な牧師や教師は自らの政治的・社会的・宗教的な夢の実現を断念していた。彼らにとって現実と理想とはあまりにも乖離し過ぎていたのである。彼らは，ベンゲルが預言した年，1836年以前に共同体をキリスト教化することは不可能であると感じた。彼らに残されたものは，神との絆の信仰と「自分たちは神の国の選ばれたメンバーである」という意識，それに数十年後に始まると期待された新千年王国だけであった。1780年頃から，特に1782年のエティンガーの死以降から，ヴュルテンベルクでは神学の専門分野においてベンゲル学派は急速に勢力を失い始める。

しかし，ヴュルテンベルクのピエティスムスは消え去ってしまったのではない。新たなピエティスムスが生じ，集会は拡大していったのである。当初集会や教化は牧師や教師によって，ついで学識ある平信徒（代議士や法律家等）によって主宰されていた。1780年頃からこの主宰者に織物工，農夫，農園夫，肉屋，靴製作人等の素朴な民衆が加わるのである。彼らは出席者と共に，聖書の他，アルント（Arndt, Johann 1555-1621）やベンゲル，P.M.ハーン（Hahn, Philipp Matthäus 1739-1790），エティンガーの著作を読んだ。数の上ではこの民衆的なピエティスムスが他を圧倒していた。一部の民衆的ピエティスムスは急速にセパラティストな性格を強く帯び始めた。例えば，子どもの洗礼を自ら行い，教会における堅信式を拒否し，子どもたちを学校に行かせなかった。セパラティストはごく少数であり，生成消滅を繰り返していたが，ヴュルテンベルクの全ての地方で騒動を引き起こしていた。彼らにとって，啓蒙的な神学者によって支配されていた領邦教会に従うことは悪魔に身を引き渡すことを意味してい

た。セパラティストのリーダーの一人ラップ（Rapp, Johann Georg 1757-1847）は西部ヴュルテンベルクで自称3千名から4千名の信者を獲得していた。1803年彼らは北米のピッツバーグに移住し，そこで主の再臨を待ち望みつつ，財産共有・独身制の共同生活を送った。

民衆的ピエティストの代表的な人物が農民出身のJ.M.ハーン（Hahn, Johann Michael 1759-1819）である。1789年彼は次のように述べている。「キリスト教徒の群れの中に公然とアンチキリスト教徒が出現している。昨今，アンチキリスト教徒であることがほとんど流行となっている。多くの偽メシアも現れている。主が再臨する時は近づいているのだ。この困難な時代にあってはお上に対する暴動ではなく，個人的な救いこそがわれわれの目標である」と。ハーンは信者に，忠実，思慮深さ，素朴，平静，内省，期待の内に神に仕えるよう説いた。また彼は，父祖エティンガーと同じく，自然の中にも神的なものを捉える。彼は言う，「神は，人間の良心の書物に基いてのみならず，自然すなわち偉大なる創造の書物に基いても認識され読まれることができるのだ」[7]。さらに彼は，来るべき主の再臨の日，人間も自然も全てのものが神の子へと新たに生まれるのだと強調した。（当時の信者数は不明。1960年現在，ヴュルテンベルクとバーデンの300ヶ所に1万人の信者が存在する[8]。）

1789年頃からヴュルテンベルクでは上からの革命（絶対主義者フリードリッヒ公による憲法制定の構想）と下からの革命（フランス革命）の脅威が吹き荒れていた。素朴な民衆は，嘗てないほど大勢で集会に押し寄せてきた。集会のリーダーは時代の政治的混乱を参加者に説明し，この終末時の混乱の時代における信者に慰めを与えた。この十年間神学界において異端的神学と見なされてきたベンゲルやエティンガーの終末論的思想が民衆の間で政治的な意義を持ってきたのである。更にこれを助長したのが，書物や新聞を通してのピエティスムスに対する啓蒙の激しい攻撃であった。啓蒙主義はますます勢力を強め，例えば教会のサクラメントの中でもっとも重要である洗礼において，「悪魔払い」が廃止された。19世紀に入ると，ラップのグループのみならず多くのセパラティストがこのような世界に失望し，新天地を求め，北米やロシアに移住を始めるのである。

［シェリング，ヘーゲル，ヘルダーリン］

ヘーゲルは1770年にシュトゥットガルトに生まれている。シュヴァーベン地方には，16世紀より信仰の自由を求めて多くのプロテスタントがシュタイエルマルクやケルンテルンおよび他の地方から移住してきおり，ヘーゲルの祖先も同じくオーストリアか

ら逃れてきたのである。ヘルダーリンは1770年，ラウフェン(Lauffen am Neckar シュトゥットガルトの真北約1.2km）に生まれている。彼の父は修道院長であり，母は牧師の娘であった。彼は，母や祖母それに叔母からピエティスムス的な教育を受けている。シェリングは1775年，ヴュルテンベルクのレオンベルク（シュトゥットガルトの西隣り町）に生まれている。この町はレッシングの友人ケプラーの故郷でもある。彼の父親はピエティスムスの一派ヘルンフート教団の影響を強く受けた牧師であり，シェリングが二歳の時，テュービンゲンの北に接するベーベンハウゼンの教会に赴任している。

ヘーゲルとヘルダーリンがテュービンゲン神学校に入学して一年後（天才の誉れ高いシェリングは1790年に15歳で入学している)，世界史的な大事件すなわちフランス革命が生じている。1789年，民衆がバスティーユ監獄を襲撃し，革命の口火が切られた。テュービンゲンは，フランスとドイツの国境をなすライン川上流から東方へわずか70kmしか離れていず，革命的パンフレットや新聞がフランスからこの地に入ってきて，多くの若者に貪り読まれた。また，フランス国内にあるヴュルテンベルク公国の飛び地から神学校に学ぶ者もあり，フランスに劣らずかなり詳しい革命の情報が入ったようである。神学校の学生たちは熱狂的にフランス革命を歓迎した。彼らは政治クラブを結成し，ヘーゲルとヘルダーリンも，後にシェリングもそれに加わった。カール＝オイゲン公は，神学生の間で革命の演説が行われ，自由の賛歌が作られ，ラ・マルセイエーズが歌われているという報告を受け取ると直ちに神学校の食堂に姿を現し，学生たちを懲戒した。常に主席の座を占めていたシェリングは，ラ・マルセイエーズをドイツ語訳したのではないかという嫌疑をかけられ，公から「この事態を遺憾に思わないのか」と叱責された。シェリングはこれに対し，「陛下，われわれは皆，いろいろな点で過ちを犯しています」と答えた。1791年のある日開催された祝祭の寄せ書き帳にヘーゲルは「暴君に抗して！」「自由万歳！」「ジャン・ジャック万歳！」等の言葉を書きなぐった。ヘルダーリンは『自由に寄せる賛歌』(1791年）の中でフランス革命の理想（自由・平等・主権在民）を高らかに謳いあげた。

この三人に共通する思想は何であろうか。それは自然と人間を貫く，あるいは絶対者と有限者を貫く全一性とも言うべきものである。

シェリングは1797年の『自然哲学の理念』，1799年の二つの『自然哲学の体系』の論文を踏まえて，1800年に『先験的観念論の体系』を発表した。『自然哲学』は，自然がいかに精神へと高まり，精神との同一性に到達するかを述べたものである。『先験的観念論の体系』では逆に，精神がいかに自然との合一へ達するかが述べられている。この精神の歩み，すなわち「精神のオデュッセイ」[9]の最終段階が芸術であり，芸術におい

て精神と自然との合一が実現される。芸術家は意識をもって創作活動をするのだが，しかし，彼を導いているのは彼の主体性ではなく，彼の内の「暗い」無意識的で自然な力である。完成された芸術作品は，意識をもって作り出されたという面では自由の産物であるが，無意識が導いたという面では自然の産物である。

ヘルダーリンは，1798年の『エムペドクレスの死—第一稿』以来，有限と絶対の分裂を絶対者そのものに関係づけて，神的なものの運動の一過程として捉えるようになる。98年11月の弟に宛てた手紙で彼は，「神的なものは，それが発現するとき，かならずある種の悲哀と屈辱を伴わずにはいない」と述べている。99年秋の『エムペドクレスの基底』においては，分裂が「過度の親密性」と捉えられている。つまり，根源的に人間と自然は一なのであるが，その親密性は直接なままでは意識されない。その親密性が自覚されるためには，人間が悲劇の中で自然と厳しく対立し，そしてこの対立を克服し，自覚的に再合一を成し遂げなければならないのである。しかし，実は，この運動は人間の力によるのではない。その基底には神的なものが運動しているのである。

ヘーゲルの全一性は初期の神学論にもその萌芽を察することができるが，哲学的に最も明確に表現されているのは『エンツィクロペディ』(1830) においてであろう。この構造は，論理，自然，精神からなる。言わば論理は，神そのものの運動すなわち純粋理念を表現する。そして，自然は，理念が外化されたものである。神的なものは内に自らを否定しつつ運動していくのである。そして，否定を介した理念と自然との総合的運動が精神である。精神は，まずは意識・自己意識・理性という運動を経て，家族・市民社会・国家を経て，芸術・宗教・哲学へと上昇して行く。最後の哲学において再び，純粋理念の世界へと踏み入っていく。

[ブルームハルト親子]

父ブルームハルト (Blumhardt, Johann Christoph 1805-1880) はシュトゥットガルトに生まれ，テュービンゲン神学校に学んだ。彼の終末論的な思想は，彼がヴュルテンベルクのピエティスムス的雰囲気の中で育ったということを明確に表している。しかし，彼の終末論は，ヴュルテンベルクのピエティスムスの終末論を特徴付けている静寂主義とはかなり趣を異にする。確かに彼も一刻も早い主の再臨を待ち望むのである。しかし，再臨は未だ実現しそうに思われない。彼は次のように，人間の内にその問題を探る。——神の側では再臨は既に整っている。しかし，人間の側にその機が全く熟していない。いや，機が熟するどころではない。教会や信者がこのまま不信仰

であり怠慢なままであれば，われわれは全て地獄へ向かうことになる。われわれが，共に地獄に落ちるのではなく，天国に昇ることを望むのであれば，われわれ全員は悔い改めて，全てのことを改めなければならない[10]。——

子ブルームハルト（Blumhardt, Christoph Friedrich 1842-1919）の信仰は父から大きな影響を受けている。彼は，父の方向性をさらに強めて，神の愛が教会内に制限されずに現実世界に及ぶことを確信し，社会のさまざまな出来事に関心を持った。特に労働者階級に共感し，彼らの解放のために尽力し，社会民主党の議員となって活躍した。

結び

「その宗教的風土のみがヴュルテンベルクの偉大な人々を生んだ」というのは極論であろう。ヘーゲルを例に取ってみよう。彼の思想の土壌は若い頃過ごしたヴュルテンベルクの精神性のみではない。プラトン，シェイクスピア，ゲーテ，カント，フィヒテ等々様々な時代のそしていろいろな国々の人々の思想を吸収，克服し，故郷を越えた世界の歴史の動きを洞察しつつ，独自の思想を築き上げている。しかし，それでもわれわれはヘーゲル哲学の内に，初期の神学論から後期の体系まで繋がっている一本の線を捉えることができる。この一本の線とは，ヴュルテンベルクの宗教性（絶対者と有限者の一性に対する信仰）にしか還元し得ない精神性である。このことは，ヘーゲルのみならず他の思想家，宗教家，文学者についても言えるのである。その思想や信仰形成に彼らの故郷の精神性が多かれ少なかれ関わっているのである。

また，ヘーゲルの終末観とエティンガーのそれとの大きな差異を考えると，「果たして共通の精神性があるのか」という疑義が生じるのも当然である。確かに前者の「終末」と，ヴュルテンベルクのピエティスト達が文字通り信じている「終末」とを同一視することはできないであろう。ヘーゲルの「終末」は，言わば歴史における理性の自己実現の完成である。エティンガー達が信仰する「終末」は，全てのものが神の国に還帰し神的なものに高まっている新しい世界の始まりである。この新世界においては，例えばライオンと赤子とが共に並んで安らっている。ヘーゲルの思想にこのようなイメージを摑むことは全く不可能である。だが，「神的なものが有限者を媒介としつつ自らへ還帰する」運動の到達点としての「終末」は，ヘーゲルもエティンガーも共通である。言わば，ヴュルテンベルクの宗教性が様々な形態（信仰や思想，文学）をとって豊かに発現しているのである。

ヴュルテンベルクの独自の精神性を探ることにより，われわれはより深く，この地

出身の思想家や宗教者，文学者のザッヒェを捉えることができるであろう。あるいは，今まで隠されていた彼らの真実が露わになるかもしれない。

Das württembergische religiöse Klima —die geschichtliche Skizze—

Hidenori NAKASHIMA

Zusammenhang:

In Württemerg seit alten Zeiten haben viele große Geistliche, Schriftsteller und Philosophen, z.B. Bengel, Oetinger, Hahn, Blumhardt, Hölderlin, Schelling und Hegel usw. zur Welt gekommen. Aber wäre es zu extreme, zu behaupten daß nur das württembergische religiöse Klima die obengannte Leute erzieht hat. Und wäre es möglich, die gemainsame Religiösität in ihnen zu leugnen, wenn wir z.B. auf die Differenz zwischnen Hegelschen und Oetingerschen Eschatologie achten. Die erstre ist die Vollendung der Realisierung der Vernunft. Die letztere ist der Beginn der neue Welt, wo alles zu seinem Ursprung d.i. dem Reich Gottes zurückkehrt hat und Gotteskind geworden hat. Aber wir können die gemainsame Gedanke oder Glauben in ihnen erkennen, das ist, daß das Göttliche oder das Absolute in den Geschaffenen oder den Endlichen existiert und durch die Zusammenhang mit ihnen zu sich entwickelt. Nämlich in der verschiedenen Gestalten hat die württembergische Religiosiät hervorgetreten hat.

Wir würden die Sache der größen Leute tiefer erkennen können, indem wir sie unter der Lichten der würrtembergischen religiosität studieren.

註

1 タキトウス（泉井久之助訳）『ゲルマーニア』岩波文庫の泉井氏の註による。

2 前掲書，p.42

3 前掲書，p.189

4 F.ハルツンク（成瀬治訳）『ドイツ国制史』岩波書店，1980年

5 Hartmut Lehmann, *Pietismus und weltliche Ordnung in Württemberg von 17. bis zum 20. Jahrhundert*. Stuttgart 1969, SS.15, 16.

6 hrg. v. Johannes Hoffmeister, *Dokumente zu Hegels Entwicklung*, Stuttgart-Bat 1936. S.23.

7 Johann Michael Hahn, *Briefe aus der ersten Offnenbarung Gottes durch die Schöpfung bis an das Ziel aller Dinge, oder das System seiner Gedanken*. 2. Auflage. Tubingen 1839, S.152.

8 hrg. v. Kurt Galling, *Religion in der Gechichte und Gegenwart*, 3. Auftrag. Tübingen 1960. Bd.3. S.

30.

9 Schelling, *System des taranszendentalen Idealismus*, Schellings Werke hrg. V. Schröter, C.H. 1956, Bd.2, S.628

10 Johann Christoph Blumhardt, Verkündigung, 2. Ausflage. Giessen 1991. SS.105-122, u.a.

参考文献

Hermelink, Heinrich, *Geshichte der Evangelischen Kirche in Württemberg von der Reformation bis zur Gegenwart*. Stuttgart u. Tübingen 1949

Lehmann, Hartmut, *Pietismus und weltliche Ordnung in Württemberg vom 17. bis zum 20. Jahrhundert*. Stuttgart 1969

Stoeffler, F. Ernest, *German Pietism during the eighteenth century*, Leiden 1973. §3. Characteristic manifestations of Pietims in Württemberg

Beyreuther, Erich, *Geschichte des Pietismus*. Stuttgart 1978. §5. Johann Albrecht Bengel, der württembergische Pietismus und Friedrich Christoph Oetinger

hrg. vom Evang. Gesamtkirchengemeinde Tübingen, *Stadt und Kirche*, Tübingen 1978

Haug, Richard, *Reich Gottes im Schwabenland*. Metzingen 1981

Brecht, Martin, *Geschichte des Pietismus*, Bd.2. Göttingen 1995. §4. Der württembergische Pietismus